

資本主義と平等

著者からの手紙

「京浜歴史研究会報」に連載していただいた小生の著作集の紹介・批判ありがとうございます。

執筆者に会報発行の都度御礼申上げるべきですが、怠けて今日になってしまいました。ここに改めて執筆・編集の労に心から感謝の意を申します。機会があれば、皆様によりしく御伝え下さい。

著作集が共同研究の材料として、不適當ではなかったか、結局無駄骨を折らせたことになったのではないかと申訳なく思っています。

著作集の「はしがき」「あとがき」にも書いたことですが、私の論文は発表のたびに読み捨てられる種類のものと始めから考えていました。現代が歴史研究に求めているものと、歴史の学問的追究との接点に、私の論文を置くことを終始考えていたからです。それならば何故、著作集として旧稿そのままを今日出したのか、そう問われると、正直いいますと、答えることはできません、というだけでは、無責任な話ですので、いつかまとめて書いて見るつもりです。ただ著作集の話が出た八〇年代末の世界の激動に刺激されたという点だけを申添えておきます。老人の頑固さ故かもしれないませんが、私のこれまでの問題意識の核心を、あらためて九〇年代の新しい潮流のなかで、さらに確かめてみたいという「妄想」をもっていきます。

歴史の専攻学生であった一九三〇年代中ばの時期以来、「日本資本主義論争」のなかで育ってきました。私が引きつけられた点は、民主主義と、資本主義化と、平等とは不可分だということ、自由と平等とは互いに矛盾しながら、切り離せない、また切り離してはならない関係なのだということでした。資本主義化といってもなぜ「下からの」革命と、「上からの」改革とを、はっきり分け理解すべきだと説いたのかといえ、この理由からでした。イギリス

清教徒革命のレベラーズ、フランス大革命のジャコバン派、バブーフ派の出現と敗北との歴史的必然がもつ深い意味、そうした急進派・平等派が欠如した日本の場合、その欠如を補う役割をもち、その役割の故に矛盾と破綻にまます沈淪した維新期・自由民権期の「擬急進派」「擬似平等派」（この名称は不適當ですが）のもつ、それなりのプラスの意義を探し求めてきたというのが、私の気持ちです。もとよりこういっただけでは駄目で、やはりきちっとした論文にしなければならぬので、いづれ御批判をいただける機会を作りたいと念願しています。

話は別ですが、県史を学ぶ会の成果を注目しています。こうした企画とその成果がもつ意味は、今日の学界状況のなかで大変大きいと存じます。

甚だ内容のない書翰になってしまいました。執筆者の方に御覧下さっても結構です。

重ねて書評の労をとって下さったことに御礼申し上げます。

一九九三年二月

遠山茂樹

会報に「遠山史学の世界」を連載中の一昨年一二月、遠山茂樹氏より感想の書簡をいただきました。そこで遠山氏の御了解を得て「著者からの手紙」として年報に転載させていただきました。遠山氏には重ねて感謝いたしたいと思います。

（京浜歴史科学研究会事務局）